



研究用試薬

## ヒストファイン

第一抗体

CD10モノクローナル抗体(56C6) (ヒストステイナー用)

(動物種: マウス)

包装: 60テスト(12mL) Code: 713261

製造販売元

株式会社ニチレイバイオサイエンス

〒104-8402

東京都中央区築地6-19-20

TEL. 03(3248)2208 FAX. 03(3248)2243

■本品は、自動染色装置ヒストステイナー用の試薬 第一抗体である。

■特異性および抗原分布:分子量 100kDaの膜貫通型糖蛋白であるヒト CD10 抗原と特異的に反応する。CD10 は、common 急性リンパ性白血病抗原(CALLA)と特異的に反応する。CD10 抗原は、リンパ芽球性リンパ腫、濾胞性リンパ腫、バーキットリンパ腫で発現している。正常細胞・組織では成人骨髄中の未熟な B 細胞やリンパ節の胚中心 B 細胞に発現している。また、腎系球体上皮細胞、腎尿細管上皮細胞、乳腺筋上皮細胞、消化管上皮細胞などにも発現している。

■クローン名: 56C6

■抗体のサブクラス: IgG1

■免疫原: リコンビナント CD10 抗原。

■由来: ハイブリドーマの培養上清より得ている。

## 1. 内容

第一抗体・・・CD10モノクローナル抗体(56C6)(動物種: マウス)。  
液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と 0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1 バイアル中に 12mL を含む。

## 2. 使用目的

組織・細胞中のヒト CD10 陽性細胞の染色。

## 3. 切片の準備

前処理(抗原賦活化)としてヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (10 倍濃縮)(Code:415211)またはヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (調製済)(Code:415201)を用いたオートクレーブ処理が必要である(裏面参照)。

■参考: 組織の固定状況等によりヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (10 倍濃縮)(Code:415211)またはヒストファイン 抗原賦活化液 pH9 (調製済)(Code:415201)の代わりに 10mM クエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理をすることで、より良好な染色結果が得られる場合がある。

## 4. 使用方法

1) 他の試薬とともに試薬ラック(ヒストステイナー用)にセットし、染色を開始する。

2) 染色終了後、すみやかに 2-8℃に保存する。

## 5. 染色方法の設定

反応時間を 30 分間とする。

## 6. 貯法

2-8℃保存。

## 7. 使用上又は取扱上の注意

ヒト由来の検体は、取扱者に感染をひき起こす危険性がある。従って、適切な取扱および廃棄法を用いるとともに、この免疫組織(細胞)化学染色法を施行するに際し、関連技術および操作法に充分習熟しておかなければならない。

試薬バーコードラベルを使用する場合は、自動染色装置ヒストステイナーのプログラムにバーコードラベル情報を入力する必要がある。本製品が未登録の場合は、下記データを入力(漢字のみ全角、他半角入力)し、登録すること。

専用ボトルに貼付されているバーコードラベル内の情報

試薬名	CD10モノクローナル抗体(56C6)
試薬略称(10文字)	CD10-MM
バーコード	CD10-MM
時間(分)	30

## 8. 主要文献

- (1) Haralambidou, S. et al : J. Clin. Pathol. 40 : 490, 1987
- (2) Chu, P. et al : Am. J. Clin. Pathol. 113 : 374, 2000

### ■ 研究用としてのみ使用すること。

### ■ 切片の準備

1. 50℃で十分に湯伸ばしした切片(3-4μm厚)をシランなどのコーティングスライド上に張り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。
2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS
3. 前処理(抗原賦活化) : オートクレーブ処理
  - ① 抗原賦活化液 pH9 を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
  - ② バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
  - ③ 120℃、20分間オートクレーブ処理する。
  - ④ 圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
  - ⑤ バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。  
※オートクレーブ処理後は、バットおよび抗原賦活化液 pH9 等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
  - ⑥ スライドを抗原賦活化液 pH9 から取り出し、PBS またはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ピンを使用する)。

### ・ 抗原賦活化液 pH9 の作り方

- ・ Code : 415201 抗原賦活化液 pH9 (調製済)は、そのまま用いる。
- ・ Code : 415211 抗原賦活化液 pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。

### ■ 参考 : 10mM クエン酸緩衝液(pH6.0)を用いたオートクレーブ処理の場合 (おもて面の■参考参照)

- ・ 10mM クエン酸緩衝液(pH6.0)の作り方  
A液 9mL+B液 41mL+精製水 450mL

- A液 : 0.1M クエン酸水溶液  
クエン酸一水和物( $C_6H_8O_7 \cdot H_2O$ ) 2.1g/精製水 100mL
- B液 : 0.1M クエン酸ナトリウム水溶液  
クエン酸三ナトリウム二水和物( $C_6H_5O_7Na_3 \cdot 2H_2O$ ) 14.7g/精製水 500mL

A液、B液は常温で保存可能である。ここから必要な時に調製する。